



TITLE:

HAKUBI : Half Decade of Hakubi Project 2009-2014

AUTHOR(S):

CITATION:

HAKUBI : Half Decade of Hakubi Project 2009-2014. 2014: 1-20

ISSUE DATE:

2014-08-21

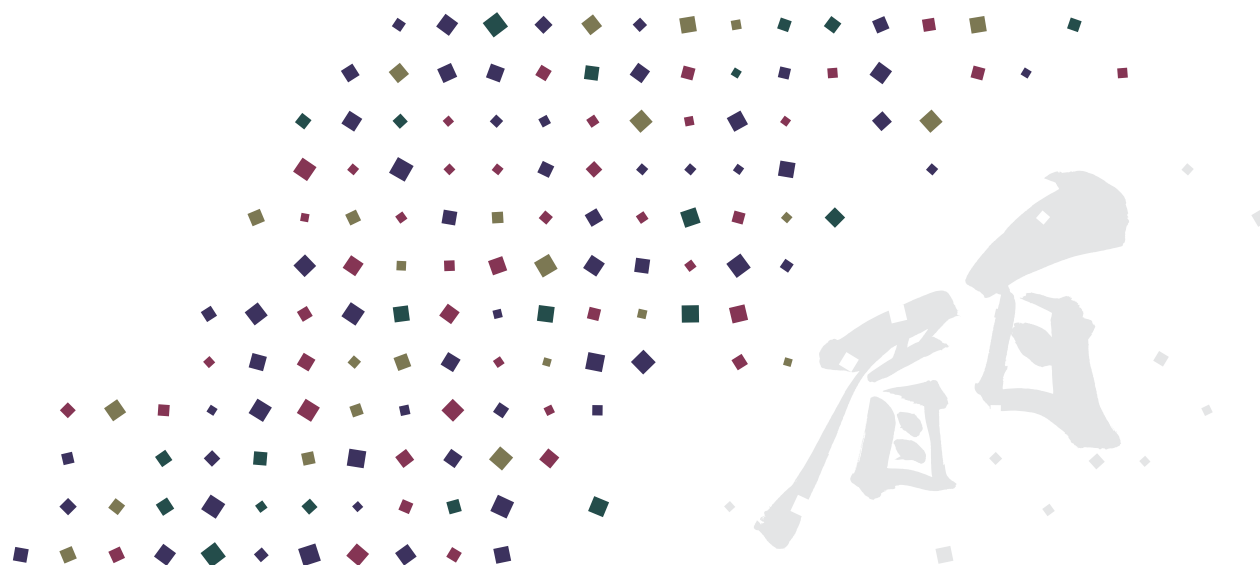
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/189527>

RIGHT:

HAKUBI

Half Decade of
Hakubi Project
2009-2014





Hakubi Project is...

はじめに

次世代研究者育成支援事業、すなわち白眉プロジェクトは、未来を担う先見的なグローバルリーダーを育てるための、京都大学独自の取り組みです。本学は、学内外の教員と各界の有識者とからなる伯楽会議が分野や国籍を問わずに厳選した世界の俊英を白眉センターへ迎え入れ、研究に専念できる自由な環境と、学問分野の垣根を越えた若手同士の相互研鑽の場を提供しています。平成21年9月の開始以来、多くの教員のご理解、ご支援と、伯楽会議委員の献身的なご協力、ならびに学外からの広いご賛同とを得て、このたび5年目を迎えることができました。今やHAKUBIの名は

海を越え、世界中から優秀な研究者が次々と応募してくれています。また、本プロジェクトを巣立った者たちは、京都大学だけでなく、世界各地に羽ばたき、活躍を始めています。

そこで本冊子では、簡単ではありますが、白眉プロジェクトの理念や実施体制、白眉研究者の活動をまとめ、ご紹介する次第です。この小冊が、本プロジェクト関係者の熱意と、伸びやかながらも妥協することなく切磋している若手の姿とを、皆様にお伝えできたなら幸いです。

世界情勢が混迷を深め、また学問分野の専門化が深化する一方で、学際化による先進

的な学問の創出が期待されているなか、大学における教育・研究活動のありかたには、大きな変革が求められています。京都大学は、日本の若手研究者育成のモデルとなることを期待して、大学改革の柱の一つとして本事業に取り組んできました。人材育成は一朝一夕には為し得ませんが、白眉研究者は着実に成長を続けてくれています。学内外の関係者の皆様には、長期的な展望のもと、今後一層のご協力とご支援をお願いする次第です。また、京都大学の掲げるこの志に共鳴し、白眉の一員とならんとする若い皆さんの、一層の応募を強く期待しています。

平成26年8月

京都大学総長
松本 紘

白眉プロジェクト の理念

求められるのは、未来を切り拓く創造性豊かな人材。世界で活躍できる研究者を育成するための独自プロジェクトが、京都大学で進められています。

About Hakubi Project

次世代のリーダーとなる 国内外の若手研究者を支援

大学における学術研究は、研究者の自由な発想や知的好奇心、探究心をもとに展開されます。その基盤を支える上で重要なのは、チャレンジ性と創造力に富んだ人材。グローバル化が急進する昨今、学問の新たな潮流をつくりだせる広い視野と柔軟な思考力を持つ次代の担い手、すなわち若手研究者の育成は、京都大学だけでなく日本全体にとって重要な課題の一つとなっています。

そこで構想されたのが、京都大学次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」です。将来それぞれの専門分野において、世界の学問・研究のリーダーとなる人材が京都大学から巣立ってほしいという期待を込めて、優秀な若手研究者に充実した研究環境を提供する取り組みを平成21年9月にスタートさせました。

白眉プロジェクトでは、基礎から応用にわたる、人文科学、社会科学、自然科学の全ての分野の研究者を対象に国際公募を行い、毎年、最大20名を京都大学の特定教員(准教授または助教)として採用しています。

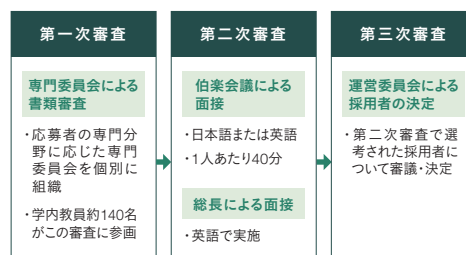
第一次審査として、応募者ごとの専門分野に応じた学内教員からなる専門委員会を組織して書類審査を行い、その後、第二次審査として学内外の有識者(「伯楽」と理事とで構成される伯楽会議が面接を実施。松本総長による個別面接も経た上で、研究面での能力のみならず、先見的な次世代のリーダーとなり得る資質などを総合的に評価して、第三次審査で採用候補者を決定します。

プロジェクトを具現化する白眉センター

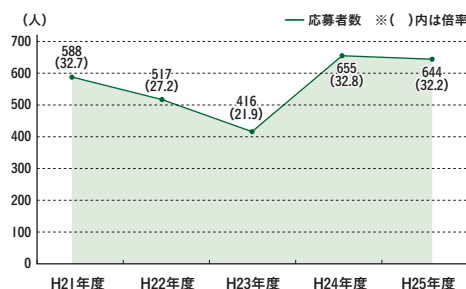
採用した白眉研究者の活動をサポートし、かつ、白眉プロジェクトを円滑に運営するために設置されたのが白眉センターです。学内組織として白眉研究者それぞれの受入部局(研究科・研究所・研究センターなど)と緊密に連携し、プロジェクトを推進します。

白眉センターは全学各部の協力のもと、センター長とプログラスマネージャーによって日ごろの運営が行われ、研究国際部が事務全般を担当。重要事項は、全学の理事・部局長・教員から選出された委員による運営委員会で審議されます。

■ 白眉研究者の審査・選考の流れ



■ 応募者数の推移



■ 京都大学白眉センター第6回伯楽会議(平成26年度)委員

氏 名	所 属 および 職 階
田中 耕司	京都大学白眉センター長
赤松 明彦	京都大学理事(学生・図書館担当)
淡路 敏之	京都大学理事(教育担当)
江崎 信芳	京都大学理事(総務・企画・情報環境担当)
三嶋 理晃	京都大学理事(病院・国際担当)
吉川 潔	京都大学理事(研究担当)
金田 章裕	大学共同利用機関法人人間文化研究機構 前機構長
松井 孝典	千葉工業大学惑星探査研究センター 所長
生駒 俊明	ギヤノン株式会社代表取締役副社長
安西祐一郎	独立行政法人日本学術振興会 理事長
中西 友子	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
数土 文夫	東京電力株式会社取締役会長
小野 元之	城西大学大学院センター 所長
Christophe Marquet	フランス国立東洋言語文化学院教授、日仏会館フランス事務所長
毛里 和子	早稲田大学名誉教授
西川 伸一	株式会社JT生命誌研究館顧問、NPO法人オール・アバウト・サイエンス・ジャパン 代表理事
白石 隆	政策研究大学院大学 学長
柘植 綾夫	公益社団法人日本工学会 会長
山本 克己	京都大学大学院法学研究科 科長
高倉 喜信	京都大学大学院薬学研究科 科長
宮川 恒	京都大学大学院農学研究科 科長
杉万 俊夫	京都大学大学院人間・環境学研究科 科長
藤井 滋穂	京都大学大学院地球環境学 学長
小柳 義夫	京都大学ウイルス研究所 所長
向井 茂	京都大学数理解析研究所 所長
原 正一郎	京都大学地域研究統合情報センター 所長
川上 浩司	京都大学理事補、大学院医学研究科 教授
間藤 徹	京都大学理事補、大学院農学研究科 教授
堀 智孝	京都大学特任教授、白眉センタープログラスマネージャー
瀬原 淳子	京都大学再生医科学研究所教授、白眉センタープログラスマネージャー
伏木 亨	京都大学大学院農学研究科教授、白眉センター 顧問

伯楽会議委員からの声

城西大学大学院センター 所長 小野 元之 氏

白眉プロジェクトは、今のところ非常にスムーズに進行していると思います。では、このシステムを今後どのようにしていくのか、大学運営全体からの問題もあるでしょう。人材育成は時間がかかって当たり前です。白眉研究者の雇用期間は5年ですが、プロジェクト自体の継続のために何をしなければならないのか、そろそろ考えていく必要があるでしょう。

白眉に選ばれた 世界の俊英

高い競争倍率と厳正な審査を通過し集まった
白眉研究者たちは、国籍も専門分野もさま
ざま。日本に求められているダイバーシティが、
白眉プロジェクトでは実現しています。

Key words / VARIOUS

国や専門分野は不問 選び抜かれた優秀な人材

博士の学位を有する者、あるいは学位取得者と同等以上の学術研究能力を有する者であれば、外国人を含めて、誰でも応募できるのが白眉プロジェクトの特長。京都大学の教員や学内外の有識者による厳正な審査を経て選ばれた研究者は、国籍も性別もさまざまです。30歳前後を中心とした年齢構成で、女性研究者も数多く在籍しています。

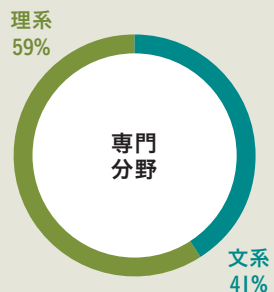
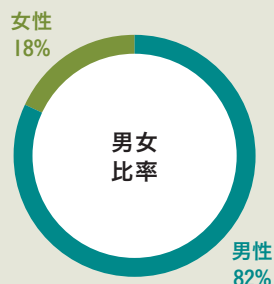
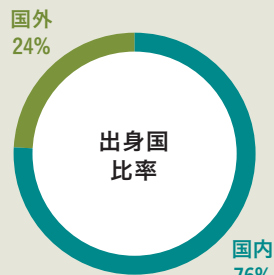
混迷を深める社会情勢のもと、大学の教育・研究活動を取り巻く環境は厳しさを増していますが、白眉プロジェクトは、京都大学のための人材確保を目的として発足したものではありません。学術・科学の幅広い分野で総合力を発揮してきた京都大学の伝統を生かして、専門分野や国境などの境界にとらわれずに新しい研究領域を開拓もしくは創造し、将来、世界の学術・科学を牽引できる研究者を輩出することが第一の目的です。

そのため、採用された者たちの専門分野は多様であり、人文科学、社会科学、自然科学の全ての分野にわたります。彼らは個々の専門分野の殻を破って研究力を磨くと同時に、全く異なる学術的背景をもつ研究者との密な交流を通じて、互いに越境・影響し合える柔軟な感性と豊かな知性、高い志を身に付けます。

白眉プロジェクトの始動から5年。白眉研究者や白眉プロジェクト卒業者は、京都大学内のみならず、日本ひいては世界を舞台にして、伸びやかに活躍し始めています。

■ 白眉研究者の構成

(1～5期累計)



■ 白眉研究者ピックアップ



加藤 裕美

専門領域
文化人類学

研究課題
熱帯型プランテーション開発と
地域、住民の生存基盤安定

大学で文化人類学を専攻して以来、先住民やマイノリティに関心を持ち、熱帯雨林に住む狩猟採集民の社会変容について研究してきました。現在熱帯アジアでは、急激なプランテーション開発によって森林面積が著しく減少しています。白眉プロジェクトでは、マレーシアをはじめとした東南アジアの諸地域を比較検討することにより、森林開発地に暮らす人々は、どのように安定的な生存基盤を維持することが可能なかを検討していきます。限りある自然資源とその資源を利用した人々の生活の両立可能性について明らかにしたいと考えています。




Knut Woltjen

専門領域
ヒト遺伝学、生命工学

研究課題
ヒト幹細胞遺伝子工学による
ノンコーディングDNAの機能評価

私たちのDNA配列の大部分は進化的に保存されており、同じ特徴を備えています。なぜ共通の遺伝情報から、多様性が生み出されるのでしょうか？この問いに答えるため、さまざまなゲノム領域を比較し、保存されたDNA配列の解析を行っています。また、「分子のはさみ」を用いてDNAを切断・編集するといったゲノムエンジニアリングを活用し、設計図からどのように情報が読み出されるのかを調べています。DNAの読み出し方を変化させることによって、多様性を生み出すことが可能となるのです。進化や病気のメカニズムを明らかにし、何がヒトをヒトたらしめるのか、という問いに対する答えを見つけることを目指します。



京大に親和し そして触媒になる

受入部局に溶け込んで、研究に励む白眉
研究者たち。周囲のスタッフや学生たちと
交流して大学全体に空気の循環を生み、
新たな化学反応を引き起こしています。

Key words / FUSION

学内部局に所属して 自由な環境で研究活動に専念

白眉プロジェクトで採用された研究者は、白眉センターの特定准教授あるいは特定助教として、5年の任期(年度単位)で雇用されます。そして各人の希望に沿って専門領域にふさわしい学内部局に所属し、その上で、自由に国内外を活動の場として研究に励みます。

また彼らは、研究活動に専念できるように、基本的には教育負担や受入部局での日常的な運営業務を免除されていますが、白眉センター内でさまざまなワーキンググループを組織して、研究会やセミナーの開催、センター刊行物の企画・編集、プロジェクトの広報業務など、白眉プロジェクトの推進に欠かせない基本的な業務に携っています。

大学全体に新しい空気を運び込む 白眉研究者たち

ほぼ毎月2回、定期的で開催されている「白眉セミナー」は、多岐にわたる仲間の研究活動を相互に理解し、研鑽し合うセミナーです。1人の発表者による講演会形式から、複数人によるシンポジウム形式まで、白眉研究者自身が自由な発想で企画します。原則として学内の誰もが聴講できるため、白眉プロジェクト内外の研究者が自然に顔を合わせ、学際的な議論や知識の共有が生じる場となっています。

白眉プロジェクトを介した京都大学への優秀な若手人材の受け入れは、各受入部局にはもちろんのこと、大学全体の学術研究活動に大きく貢献しています。

🎙️ 受入先からの声

農学研究科 奥本 裕教授

部局内の選考委員会で採用する人材にも期待するところは大きいですが、これと並んで、京都大学で選考した教員(白眉研究者)が配置されてくることにも大きな意義があります。前者では部局側が部局への適性などを基準に人を選考するのに対し、後者では白眉研究者が自ら希望の配置先を選択します。これにより新規の研究テーマが持ち込まれるという期待感が生まれ、さらに白眉研究者が持ち込んでくる新鮮さが研究室の雰囲気を変えるような効果もあると感じます。

情報学研究科 五十嵐 淳教授

多分野の研究者が一堂に会するので、30歳台の若手研究者育成には良い効果があるでしょう。とりわけ文系と理系が一緒にいるという効果は、その因果関係を明確に示すのは難しいですが、大事な成果につながると思います。個別部局での教員採用では、その部局での教育も判定基準に入っていますが、白眉プロジェクトでの採用は研究を主眼にしたものなので、両者はそれぞれに特徴があります。また、20人の白眉研究者を広い研究領域から一括して採用するという点にも特徴があります。白眉プロジェクトはプリンストン高等研究所に近い雰囲気です。白眉研究者は配置先で自由に活動しているので、研究室間の壁を取り払うような効果ももたらしています。

東南アジア研究所 河野 泰之教授

全学一括採用と個別部局採用では、人事の趣旨が全く異なるので、一概に比較することは難しいかと思います。部局にとって白眉研究者の受け入れは、ある意味で「おまけ」のようなものですが、「おまけ」が全体の研究の新たな展開を生む契機となることもあります。

生命科学研究科 垣塚 彰教授

非常に良いシステムであると感じています。外国ではデニュアトラックというお試し期間がありますが、白眉プロジェクトはこれに相当するシステムとして、上手く機能していると思います。

ウイルス研究所 影山 龍一郎教授

白眉研究者として研究に専念できることは、独立した研究を進展させていく上で大変貴重な機会になっています。また、同時に受け入れる側にとっても、お手本となる優秀な若手がいることで、研究室全体が活性化されています。いわば、お互いにとり有益な win-win の関係を構築できています。

■ 受入部局と白眉研究者数

部 局 名	白眉研究者数(1~5期累計)
文学研究科	11
教育学研究科	2
法学研究科	5
経済学研究科	3
理学研究科	14
医学研究科	2
工学研究科	4
農学研究科	5
人間・環境学研究科	4
情報学研究科	6
生命科学研究科	1
経営管理研究部	1
化学研究所	2
人文科学研究所	5
再生医科学研究所	1
生存圏研究所	1
防災研究所	1
基礎物理学研究所	4
ウイルス研究所	2
数理解析研究所	1
霊長類研究所	1
東南アジア研究所	5
iPS細胞研究所	2
生態学研究センター	2
地域研究統合情報センター	1
フィールド科学教育研究センター	2
学際融合教育研究推進センター	2
物質・細胞統合システム拠点	1
福井謙一記念研究センター	1

外へ出よ! 世界レベルの 武者修行

自らの力を試し、鍛えるため、そして新たな見聞を広めるために、日本を飛び出す白眉研究者たち。学問追究の情熱は、海や国境を軽々と越えていきます。



Key words / GLOBAL

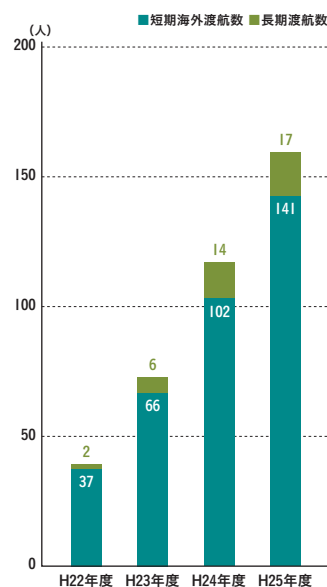
年間約200件もの海外派遣実績

白眉研究者たちは活動の場を世界各地に求めて、積極的に海を渡ります。海外へ渡航する者の数は年を経るごとに増え、平成25年度には長期（滞在期間1ヶ月以上）17回、短期（滞在期間1ヶ月未満）141回を数えました。

このように活発な海外渡航を可能としているのは、自身の研究にのみ時間と情熱を注ぐことのできる、白眉プロジェクトならではの制度と環境です。

海外における研究活動は、出身国や文化的背景の違いを超えた多くの研究者との出会いと学問的刺激をもたらし、彼らにとって、またとない研鑽の場となっています。

■海外渡航数の推移



長期海外渡航先

国名	人数	国名	人数	国名	人数
北米	アメリカ 15	EU外ヨーロッパ	スイス 1	アジア・オセアニア	ラオス 1
	カナダ 2		オーストラリア 1		台湾 1
EU	イギリス 7	アジア・オセアニア	タイ 3		中国 1
	フランス 7		フィリピン 1		

短期海外渡航先

国名	人数	国名	人数	国名	人数
北米・南米	アメリカ 95	EU	ベルギー 4	ブータン	10
	カナダ 9		ポーランド 1	フランス領ポリネシア	1
	チリ 2		ポルトガル 3	マカオ	1
EU	イギリス 17	EU外ヨーロッパ	ウズベキスタン 1	マレーシア	7
	イタリア 10		スイス 13	ミャンマー	3
	オーストリア 3		トルコ 2	ラオス	17
	オランダ 2		インド 7	韓国	19
	ギリシャ 2		インドネシア 1	香港	3
	スウェーデン 5		オーストラリア 6	台湾	20
	スペイン 9	アジア・オセアニア	カンボジア 5	中国	12
	チェコ 1		シンガポール 6	イスラエル	1
	デンマーク 3		タイ 12	エジプト	1
	ドイツ 17		ネパール 1	ナイジェリア	1
	フィンランド 3		バングラデシュ 1	南アフリカ	2
	フランス 19		フィリピン 2		

長・短期いずれも現在までの累計。また1回の渡航で複数ヶ国を訪問した例があり上記と左グラフとは総数が一致しない。

海外渡航記

スイスを拠点に研究中

青山 和司

【物性物理学(理論)】

滞在期間：平成23年4月～12月



スイス連邦工科大学チューリッヒ校に客員研究員として滞在しています。こちらの先生と新しい研究テーマに取り組むとともに、スイスを拠点にして欧米諸国の研究機関を訪問し、セミナー発表を行っています。海外研究者とのがっぷり四つの議論を通じて、新しい物理的視点・アイデアを獲得するだけでなく、この機会を将来の国際共同研究につながる礎にしたいと思っています。

自らの可能性を広げるために

佐藤 拓哉

【群生態学、生態系生態学、保全生態学】

滞在期間：平成23年6月～平成24年2月



カナダのプリティッシュコロンビア大学森林科学科で客員研究員として研究生活を送っています。渡航目的の一つは、森林と河川生態系のつながりについて、気候帯を超えた共通理解を見出すこと。もう一つは国際的な研究者とのネットワークを広げることです。世界中から集まる研究者らとの日常は非常に刺激的です。

数学研究に最適な場所、パリ


千田 雅隆

【数学/整数論】

滞在期間：平成24年6月～平成25年8月



パリ第6大学ジュシュー数学研究所で、整数論分野の研究者のもとを訪れています。フランスは歴史的に数学の研究が盛んな国で、名だたる数学者を多く輩出しています。歩き回れるところがたくさんあるパリは、じっくり考えるにはもってこいの場所なのでしょう。今回の滞在中に、未完成の研究を進展させたいと思っています。

A student in a red shirt is crouching in a rice field, working with the plants. The field is filled with green rice stalks, and white markers are visible in the foreground. In the background, there are green hills and some buildings under a clear sky.

白眉に息づく 先進の気風

独創的なアイデアと行動力を武器にして、最先端研究にチャレンジする若者たち。白眉プロジェクトには、進取の気概を持った研究者が集い、確かな成果を上げています。

Unique Researches

学内外で評価される白眉研究者

プロジェクト開始から今日までの5年間で、白眉研究者はさまざまな成果を上げました。彼らの研究は、学内外で高く評価されています。

人工 RNA 技術が拓く未来

—白眉1期 齊藤 博英（受入先：iPS細胞研究所）

齊藤准教授らは、細胞に導入した遺伝子の働きを細胞内の状態によって調節できる「RNA(リボ核酸)スイッチ」を開発。遺伝子発現を抑制する「オフスイッチ」と活性化する「オンスイッチ」を制御する手法を発見しました。分化していない細胞や標的以外の細胞を取り除くことで、iPS細胞から高品質な標的細胞を作る技術などへの応用が期待されます。



細胞内エネルギー代謝を可視化する

—白眉2期 今村 博臣（受入先：生命科学研究科）

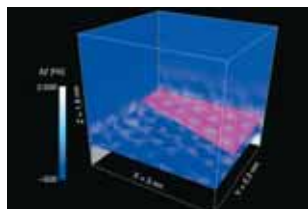
食事を摂取すると血糖値が上がり、それを感知した膵臓のランゲルハンス島中のβ細胞がインスリンを血中に分泌して血糖値を下げます。この仕組みがおかしくなると、最終的に糖尿病に至ります。今村准教授らは、これまで解明されていなかったインスリン分泌細胞内の重要因子の動態を可視化することに成功。糖尿病発症の仕組みの解明や新たな治療戦略につながるかと期待されます。



ナノの世界を観る・計る・創る

—白眉4期 小林 圭（受入先：工学研究科）

固体物質を液体中に置くと、その表面(固液界面)では液体分子の密度が不均一になります。小林准教授らは周波数変調原子間力顕微鏡(FM-AFM)を使い、シリコン製の針を界面に近づけて針に働く力を測定。FM-AFMによって固液界面における溶媒分子の粗密を三次元的に可視化することに成功しました。今後は結晶の成長や溶解、電気化学反応などをとらえることにより、これらの現象のメカニズム解明につながると期待されます。



表情コミュニケーションの心理神経メカニズム

—白眉1期 佐藤 弥（受入先：霊長類研究所）

広汎性発達障害(自閉症などの発達障害の総称、以下PDD)は、対人相互作用の障害を主症状の一つとしています。特に表情コミュニケーションの問題は顕著です。佐藤准教授らが目標とするのは、PDDにおける対人相互作用の障害の心理・神経基盤の解明。世界に類を見ない複数方法論(心理実験、電気生理学、

機能的脳画像、脳損傷研究、発達障害研究など)を有機的に統合し、新しい知見を目指します。



過去の受賞者(平成22年～平成26年6月)

※は学内賞

■平成22年度

柳田 素子 国際腎臓病学会 アジア代表
国際腎臓病学 アジア代表

■平成23年度

佐藤 弥 日本心理学会 第6回 国際賞奨励賞
大串 素雅子 第104回 日本生殖生物学会 優秀論文賞
小林 努 第6回 日本物理学会 若手奨励賞
塩尻 かおり 第4回 京都大学優秀女性研究賞(たちばな賞)※
長尾 透 第22回 日本天文学会 研究奨励賞

■平成24年度


齊藤 博英 第10回 日本生物学会 三菱化学奨励賞
塩尻 かおり 第17回 日本生態学会 宮地賞
第14回 大学女性協会 科学研究奨励賞
北村 恭子 電子情報通信学会 エレクトロニクスソサエティ
レーザー・量子エレクトロニクス研究会 第6回 奨励賞
川名 雄一郎 第1回 名古屋大学 水田賞
P.-Y. Donzé Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales, Paris
2012 論文賞
J. Rappleye George F. Bereday Award 2010
末永 幸平 情報処理学会 Journal of Information Processing
Outstanding Paper Award

■平成25年度

王 柳蘭 第6回 京都大学優秀女性研究賞(たちばな賞)※
佐藤 拓哉 平成25年度 信州フィールド科学賞
第18回 日本生態学会 宮地賞
大串 素雅子 日本繁殖生物学会 奨励賞
齊藤 博英 文部科学大臣表彰 若手科学者賞
志田 泰盛 第55回 日本印度学仏教学会賞
中西 竜也 第35回 サントリー学芸賞(社会・風俗部門)
細 将貴 京都大学アカデミックデイ賞※
前多 裕介 第30回 とやま賞(理学部門)
村田 陽平 人文地理学会 第13回人文地理学会賞(一般図書部門)
今村 博臣 日本生体エネルギー研究会 優秀発表賞

■平成26年度

細 将貴 文部科学大臣表彰 若手科学者賞
村上 慧 日本化学会 第94春季会 優秀講演賞
今吉 格 第6回 ドイツ・イノベーション・アワードゴットフリート・
ワグネル賞 2014最優秀賞



交わること 学問の垣根を 越えること

分野の枠にとらわれず、思いも寄らぬ学術の
化学反応を引き起こす若者たち。白眉プロ
ジェクトは、分野横断・学際融合的研究の
揺籃の場となっています。

Unique Researches

ユニークな学際研究が次々誕生

白眉プロジェクトでは、研究者らが分野を横断して出会い、互いを理解し、見識を戦わせて高め合っていくために、月2回の白眉セミナーを始めとする、さまざまな交流の機会が設けられています。現在は、白眉プロジェクト内はもちろんのこと、他大学を含めた白眉以外の研究者らも巻き込んで、各方面で大きく成長を続けています。

京都大学「学際研究着想コンテスト」 優秀賞・優良賞を受賞

平成25年に行われた第1回 京都大学学際研究着想コンテストで、小石助教(音楽学)、末永助教(情報学、現情報学研究科准教授)、村主助教(宇宙物理学、現理化学研究所特別研究員)、藤井助教(量子力学)、塩尻助教(生態学)による研究構想「視覚・聴覚に次ぐ第三の電子媒体『匂い』」が優秀賞を受賞しました。匂いメディアのあるべき特性に基づいて、その実現方法や問題点を、構成員それぞれの専門分野の視点から分析する企画です。現在は、社会環境問題や法整備についても同時並行させた共同研究が進められています。

また、塩尻助教が遺伝カウンセラー学、電磁工学の研究者と共同提案した「食の三段階欲求を満たす食材・食品改質による人類救済」も同コンテスト優良賞を獲得。その後、ワークショップ開催を経て、現在は山崎准教授(構造生物学)、今村准教授(生物物理学)らとともに、臨床遺伝医学、免疫学、遺伝カウンセラー学、栄養学、植物学、微生物学、電磁工学など多分野の研究者からなるグループで、食物アレルギーに対する新しいアプローチを探っています。

これらの展開について小石助教、塩尻助教は、

「白眉プロジェクトに在籍したからこそ実現した。白眉研究者は互いの研究を知っているから、構想段階で関連する分野の白眉研究者に気軽に意見を聞けて、白眉プロジェクト外の専門家も紹介してもらえる。それが大きな成功要因」と振り返っています。小さな一滴が、大きな波紋へと成長する…。白眉プロジェクトが目指す研究展開の、好例の一つと言えます。



インド古典学における“白眉的”越境研究 写本系統学という新領域

白眉プロジェクトのもと、通常は出会うことのない分野の研究者らが顔を合わせ、本人らも予想しない成果につながった一例が、志田助教(インド哲学)が主催した翻刻支援ソフトウェアSMART-GSのインド学における初の実証研究です。

端緒は平成22年10月の白眉セミナーでした。インド学分野における写本の翻刻、系統分析に関する現状を発表した志田助教は、村主助教(宇宙物理学、現理化学研究所特別研究員)や東樹助教(生態学、進化生物学、現人間・環境学研究科助教)から近年のOCR技術や定量的系統分析の手法を提言され、半年後、東樹助教を中心にワークショップ「知の共進化と多様性」を共催(平成23年3月)。これを機に志田助教は翻刻の問題に関心を強め、パデノック准教授(東南アジア地域研究、環境ガバナンス、人類言語学)との「マラヤラム文字解読ワークショップ」(平成24年2月)開催を経て、川名助教(思想史)とともに、白眉センター&京都大学応用哲学・倫理学教育研究センター(CAPE)共催セミナー「デジタル・ヒューマニティーズ

(人文情報学)の現在」を実施(平成24年12月)。このときCAPEの久木田博士ほか協働翻刻支援ソフトウェアSMART-GS開発者陣と意気投合し、断続的なセミナー開催にとどまらず、インドから招聘した研究者の協力のもと、SMART-GSのインド学における初の実証研究を兼ねたテルグ文字の解読ワークショップへと発展させました(平成25年7~8月)。

志田助教は現在、ハーバード・イェンチン研究所の客員研究員として、白眉プロジェクトでの主要課題を、写本の翻刻研究から思想史研究へと移行させています。



SMART-GSを用いたテルグ文字写本の協働翻刻

白眉プロジェクトの行事

■白眉セミナー

原則として8月を除く毎月第1、第3火曜日に開催。
平成22年度 第1回~第18回、平成23年度 第19回~第37回、平成24年度 第38回~第57回、平成25年度 第58回~第76回

■年次報告会

第1回「白眉のコスモロジー 2011」…平成23年3月17日
第2回「白眉のコスモロジー 2012」…平成24年4月12日
第3回「白眉のコスモロジー 2013」…平成25年3月11日
第4回「深化する知」…平成26年4月22日

■研究合宿

白眉研究者が泊まり込みで一堂に会し、研究発表を通じて交流する場。
白眉合宿2010…平成22年11月12日~15日
白眉合宿2011…平成23年5月26日~28日
白眉合宿2012…平成24年4月13日・14日
白眉合宿2013…平成25年4月19日・20日

■白眉の日

毎年8月9日を「白眉の日」と定め、現役とOB/OGが集う同窓会。
第1回「白眉の日」イベント…平成24年8月11日
第2回「白眉の日」イベント…平成25年8月3日

■白眉・伯楽交流会

第1回…平成25年2月1日



白眉セミナー詳細

白眉研究者主催の学際融合シンポジウム

■白眉シンポジウム

第1回「いのち・こころ・ことば」…平成24年2月14日
第2回「他者と出会う・自己と出会う」…平成26年3月6日

■白眉センター&京都大学応用哲学・倫理学教育研究センター共催企画
セミナー「デジタル・ヒューマニティーズの現在」…平成24年12月10日
シンポジウム「ライフサイエンスの現場と政策的・倫理的課題」…平成25年4月13日



研究・学問を 社会へ還す

未来の研究者を育む教育、国際貢献活動、
社会に向けた情報発信。これらの取り組みを
通して、白眉研究者の成果は広く社会へ
還元されています。

Unique Researches

学生に「学問」を伝えるポケット・ゼミ

10名程度の少人数制で行われるポケット・ゼミは、講師が、入学直後の学生を対象に専門分野の最前線を紹介したり、「勉強」ではなく、「学問」に求められる考察力を育む授業です。この学問への入門の場で、白眉研究者たちは、学生教育に携わっています。

王准教授(文化人類学、地域研究)、加藤助教(文化人類学)、中西助教(東洋史学)、西本助教(フィールド言語学)らによるゼミは、「変動するアジア太平洋を読み解く：ゼロから始める学術調査」。それぞれの専門知識と経験を生かし、日常から世界情勢までを多角的に考察する視点を教えます。現地での学術調査活動について臨場感たっぷりに語る授業に対して学生から、フィールドワークの魅力のみならず困難や苦労も学べたという声が寄せられています。最終日の学生らによる調査発表では、教室が活発な質疑応答と笑顔で溢れました。

一方、齊藤准教授(構造生物学、進化分子工学)、細助教(進化生物学)、前多助教(物性物理学、分子生物学)、山崎准教授(構造生物学)らは、本学iCeMSの諸根講師(生物物理学、細胞生物学)とともに、「生命を知る、観る、創る：いのちの科学」を開講。iPS細胞研究所や理学部附属植物園などで実際の研究現場に触れさせつつ、分子(DNA、



学生の発表風景(左：王らのゼミ、右：齊藤らのゼミ)

RNA、タンパク質)から生命体(ヒト、ヘビ)までの広範にわたる生命科学の最先端を披露し、答えのない問いへの挑戦という、学問の本質を学生に伝えていきます。

社会に伝播する 白眉プロジェクトの研究成果

坂本助教(フィールド医学、公衆衛生学)は自身の研究において、平成25年7月から始まったブータン王国の第11次国家五カ年計画の一環として高齢者ケアのシステムづくりに貢献しています。ブータン保健省と協力して作成した診療指針が各地に配布され、高齢者健診のトレーニングが保健省の正式な保健師講習システムに組み入れられました。現在も、生活の場に根ざした持続可能な高齢者健診体制の構築と、地域住民の保健・福祉への寄与を通じて、日本を含む世界の国々の保健政策のあり方を模索しています。

研究による社会貢献が評価されているのは坂本助教だけでなく、柳田准教授(腎臓病理学、病理学、発生学、現医学研究科教授)と塩尻助教(生態学)が日本学会会議 特任連携会員 若手アカデミー委員会に選出されています。

白眉研究者による書籍刊行や新聞・雑誌での記事執筆も年々増えており、白眉プロジェクトの研究成果が広く社会に還元され始めています。



坂本によるブータンでの医療貢献

刊行物、新聞・雑誌への執筆など

平成22年度	単行本・…………… 6件	一般向け講演・…………… 1件
	新聞・雑誌記事・…………… 6件	小中高生への講演・授業・…………… 1件
	テレビ番組出演・協力・…………… 3件	
平成23年度	単行本・…………… 11件	一般向け講演・…………… 7件
	新聞・雑誌記事・…………… 32件	小中高生への講演・授業・…………… 4件
平成24年度	単行本・…………… 12件	一般向け講演・…………… 4件
	雑誌・新聞記事・…………… 49件	小中高生への講演・授業・…………… 13件

おもなアウトリーチ活動

■京都大学ウルトラレッシン

【平成24年度】

「私たちが住む銀河」 長尾 透

【平成25年度】

「モーツァルトは本当はどのような人物だったのか？」 小石 かつら

「タンパク質の世界ようこそ」 山崎 正幸

■京都大学サマースクール(旧京都大学ウルトラレッシン)

【平成26年度】

王 柳蘭、千田 雅隆、鈴木 咲衣、越川 滋行

■京都大学ジュニアキャンパス

【平成23年度】

「植物のかおりを生態学する」 塩尻 かおり

【平成24年度】

「光学：私たちは何を“見て”いるのだろうか？」 北村 恭子

「生命って何？：生命の始まりから終わりまで」 齊藤 博英、山崎 正幸、大串 素雅子

「幸せについて考えよう：ブータンから学べる事」 山崎 正幸、江間 有沙、坂本 龍太

「宇宙の誕生と進化：宇宙の理解へ向けた多様なアプローチ」 大河内 豊、長尾 透

【平成25年度】

「生き物同士を繋げる植物のかおり」 塩尻 かおり

「海岸に生息する同生類(カエル)の研究」 原村 隆司

「光の波・音の波」 北村 恭子、小石 かつら

【平成26年度】

「生物学：動物の模様は何のためにあるのか？」 越川 滋行

「言語学が可能にすることは何か：言語を科学するとは？」 西本 希呼

「初めての言語調査：マダガスカルからイースター島まで」 西本 希呼

「虹の謎に迫る：光と波と、ついでに音！」 北村 恭子、Menaka De Zoysa、小石 かつら

「お米と遺伝子」 小出 陽平

■東京フォーラムのパネル展示

【平成25年度】

「病態の理解を目指した生体内ATP可視化技術」 今村 博臣

「Fメンデルズゾーンと公共演奏会：その成立と変遷」 小石 かつら

「現代日本における医療システムの経済史」 Pierre-Yves Donzé

■ポケット・ゼミ

【平成23年度】

「旅行記を読む」 川名 雄一郎

「生物多様性と共生ネットワーク」 東樹 宏和

【平成24年度】

「かおりの生態学」 塩尻 かおり

「京都大学読み歩き」 川名 雄一郎

「タンパク質のかたちを観る/生命現象を観る」 山崎 正幸、今村 博臣

「生物多様性と生態系」 東樹 宏和

【平成25年度】

「スポーツと教育の日米比較」 Aaron L. Miller

「ブータン王国に於ける人々の暮らし」 坂本 龍太

「生命を知る、観る、創る」 山崎 正幸、今村 博臣、齊藤 博英、大串 素雅子、前多 裕介

「西洋音楽の総合的研究」 小石 かつら

【平成26年度】

「西洋音楽の総合的研究」 小石 かつら

「変動するアジア太平洋を読み解く」 西本 希呼、王 柳蘭、中西 竜也、加藤 裕美

「生命を知る、観る、創る」 山崎 正幸、齊藤 博英、今村 博臣、細 将貴、前多 裕介

「ブータン王国に於ける人々の暮らし」 坂本 龍太

Beyond Boundaries

未来を見据えて

白眉プロジェクトが始まったころ、内外の大学関係者から「いかにも京大らしい」「京大だからこそできるプロジェクトですね」といった、賞賛とも、羨望とも、あるいは揶揄ともとれる言葉をよく耳にしました。プロジェクト発足当初にプログラスマネージャーを務めていたため、白眉プロジェクトを説明、紹介する機会が多かったからです。

「京大らしい」という言葉に、京都大学の教職員がもつ自由な気風や、京都大学が培ってきた自学・自習の学風が体現されているというお褒めの気持ちが込められていたのは疑いありません。その一方で、毎年最大20名の教員を雇用して5年後には累計100名になる計画ですから、言外に、大学を取りまく厳しい財政事情のなかで

「そんな無茶がよくできたね」という気持ちが込められているのも強く感じました。

たしかに前代未聞と言ってよいプロジェクトでした。優秀な研究者が内外から応募してくれるのか、学内の各部局に配属される研究者をプロジェクトとしてまとめていけるのか、ふたを開けるまで、心配でした。しかし、第1回選考審査と第1期白眉研究者17名の採用後には、その不安は消えていました。予想以上の応募があり、しかもほんとうに優秀で白眉と呼ぶにふさわしい研究者を採用することができたからです。

白眉研究者には、自由な環境のもとで存分に研究活動に励んでくれることをお願いしました。そのためには、国内外を問わずこの機会に多くの研究者と交流してほしいという期待も伝えました。

同時に、京都大学教員として雇用された以上、白眉センターの運営と、要請があれば受入部局や研究室の教育・研究活動にできるだけ協力することも重要だと付け加えました。将来、任期途中に、内外のどんな大学や研究機関に勤めることになっても通用する教員・研究者としてのひと通りの常識も磨いておいてほしいという期待を込めて、最初の白眉研究者を迎えたことをいまも覚えています。

そして、早くも5年が経ちました。その間、この冊子からもうかがえるように、当初の目的に沿って優秀な人材を京都大学に集めることができました。同時に、プロジェクトを通じて、研究者間にとどまらず、京都大学と社会とのつながりがさまざまなかたちで生まれています。その意味

では、ひとまず白眉プロジェクトは成功したと言っ
てよいかと思います。一方で、この5年のあいだに、
大学を取りまく環境はますます厳しくなり、大学改
革、教育改革の声が高まっています。研究公正をめ
ぐる社会の目も厳しくなっています。こうした環境
のなかで白眉プロジェクトも今後の方向性を定め
ていかねばなりません。

その気持ちを込めて、この冊子の締めくくりを
「Beyond Boundaries: 未来を見据えて」としまし
ました。白眉プロジェクトでは、今後も、自らの専
門分野を固めつつ容易にその境界を跨いで他分野
の研究者との議論や共同作業を楽しむことができ
る人材に活躍の場を与えていくこととなります。

一般的に、プロジェクトというものは時間と

ともにある種の惰性に陥る危険をはらんでいます。
人材育成の成果は短期間のうちに現れるものではな
く、おそらく20年、あるいは30年後の白眉研究
者の活躍如何によってその成果が判断されるはず
です。その意味では、プロジェクトの成果を短兵
急にあげつらう必要はないわけですが、一方で、
所期の目的を忘れることなくプロジェクトを持続
させることが難しいことも実感しています。魅力
的な白眉プロジェクトとするために必要な取り
組みをこれからも考えていく必要があることを痛
感するこのごろです。

大学改革のために若手人材をどう確保する
のか、そのためにどんなプログラムを用意する
必要があるのかという問題にいま関心が集まって

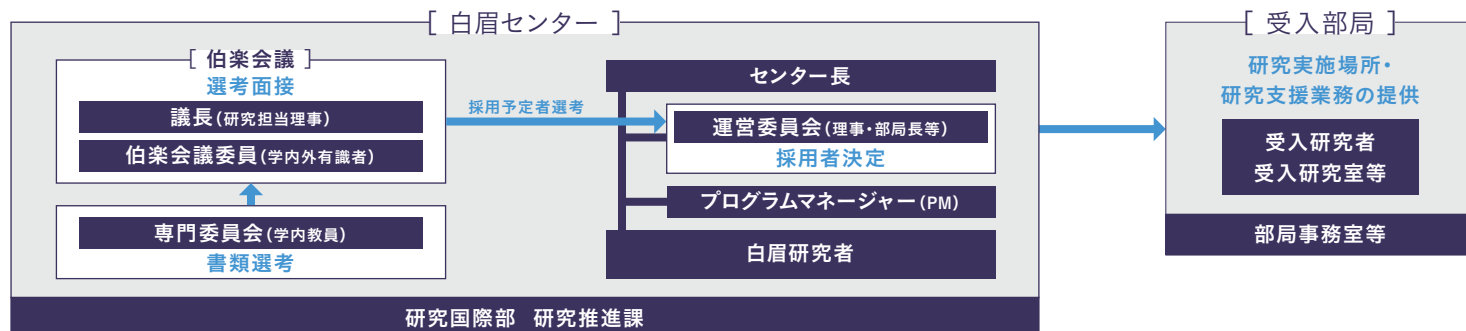
います。その一つのモデルとして若手育成プロ
グラムの嚆矢となった白眉プロジェクトが注目
されるようになってきました。そのことはま
たくの想定外でしたが、それに答えるプロ
グラムとして白眉プロジェクトをさらに磨きあ
げていくことも必要となるでしょう。

学内外の皆様の協力なしにはこの5年間の
プロジェクト運営が成り立たなかったことを感謝
の気持ちとともに実感しています。「京大らしい」
長い目でこのプロジェクトを見守っていただき、
「京大に白眉あり」という時代を迎えることが
できるよう、皆様の一層のご理解とご支援、
ご協力をお願いする次第です。この冊子が、
こうした気運の高まりの一助となることを期待
しています。

平成 26 年 8 月

京都大学白眉センター長
田中 耕司

01. 組織・実施体制

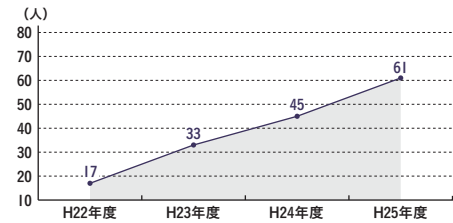


02. 白眉研究者一覧 (OB/OGも含む)

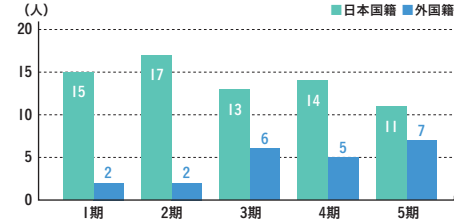
氏 名	研究課題名	氏 名	研究課題名
1 期 Aaron L. Miller	The idea of education in modern sports : Historical and ethnographic constructions from the US and Japan	3 期 末永 幸平	ハイブリッドシステムのための超準解析を用いた静的検証手法
1 期 青山 和司	磁場中超伝導状態における磁気揺らぎの効果の理論的研究	3 期 Cédric Tassel	Synthesis, Properties and Characterization of Ordered/Disordered Mixed Anion Perovskites
1 期 上野 賢哉	論理サイズ下界に対する線形計画法の方法論	3 期 橋合 智子	蝸牛発生の制御機構解明と聴覚再生医療への応用
1 期 小川 洋和	人間の暗黙知の源となる潜在認知過程メカニズムの解明	3 期 中西 竜也	多言語原典史料による近代中国イスラームの思想史的研究
1 期 川名 雄一郎	古典的功利主義の社会思想の研究—体系的理解と現代社会への提言	3 期 西山 雅祥	タンパク質分子機械力学応答の <i>in vivo</i> イメージング
1 期 齊藤 博英	シンセティック・バイオロジーを活用した細胞機能制御技術の開発	3 期 Panche Naumov	New materials and chemical systems for alternative energy conversion
1 期 佐藤 弥	顔を通じた社会的相互作用の心的メカニズムの解明	3 期 Pierre-Yves Donzé	Economic History of the Japanese Health System / 現代日本における医療システムの経済史
1 期 塩尻 かつり	植物コミュニケーションの生態系へのインパクトとその利用	3 期 前多 裕介	分子の構造、情報、輸送の動的結合の解明による生命の起源の研究
1 期 志田 泰盛	古典インド聖典解釈学派による音声の永遠性論証の研究	3 期 三枝 洋一	リジッド幾何を用いた <i>D</i> 進代数群の表現論の幾何的研究
1 期 千田 雅隆	ガロア表現の変形と保型に関する特殊値の岩澤理論的研究	4 期 Knut Woltjen	Functional evaluation of non-coding genomic regions using nucleotide-specific genetic engineering in human pluripotent stem cells.
1 期 東樹 宏和	生命系の共進化: 新奇なモデル系の確立による分野横断型アプローチ	4 期 額定其芳	モンゴル法制史研究の原典史料に基づいた再構築
1 期 Nathan Badenoch	Language, Diversity and Resilience in the Transition to Sustainable Society	4 期 王 柳蘭	アジアにおける中国系ディアスポラと多元的共生空間の生成
1 期 前田 理	反応経路自動探索法による生化学反応機構の系統的量子化学的解明	4 期 置田 清和	God as Paramour: Ethic and Aesthetic of Emotion in Early Modern South Asia
1 期 松尾 直毅	遺伝子改変マウスを用いた記憶学習のメカニズムの研究	4 期 加藤 裕美	熱帯型プランテーション開発と地域住民の生存基盤の安定
1 期 村主 崇行	偏微分方程式の数値解析のための大規模並列プログラムの自動生成	4 期 小出 陽平	イネ種間雑種における不稔発生機構解明と異種親和性遺伝子の創出
1 期 柳田 素子	新しい国民病、慢性腎臓病の病態解明および治療法・診断法の開発	4 期 小林 圭	生体分子と水との相互作用計測に基づく生体機能発現の可視化
1 期 吉永 直子	鱈翅目幼虫腸内物質FACsから拓く昆虫の窒素栄養代謝制御の研究	4 期 米田 英嗣	自閉症者の感情理解メカニズムの解明
2 期 赤木 剛士	木本性作物の異種ゲノム間融合応答機構の解明	4 期 齊藤 隆之	超高エネルギーガンマ線で探るバルサの放射機構
2 期 Asli M. Colpan	Business Groups around the World: Theoretical Analysis and Empirical Synthesis	4 期 重森 正樹	弦理論とブラックホールの物理
2 期 今村 博臣	細胞内エネルギー代謝可視化技術を用いた代謝と疾患の研究	4 期 Giraud Vincent	The Japanese Path Beyond Metaphysics: the Kyoto School and Neoplatonism
2 期 今吉 格	成体脳ニューロン新生の高次脳機能と精神疾患への関与の解明	4 期 Marc-Henri Deroche	The nature of mind according to the philosophical view of Dzogchen as found in Buddhist sources from the Himalayas
2 期 江波 進一	独創的な手法による大気環境化学における界面反応の本質的解明	4 期 Steven Trensou	日本中世における密教神道交渉史の研究
2 期 大串 素雅子	核小体の新規機能の解明	4 期 西本 希呼	無文字社会における数概念の研究: オーストロネシア語圏を中心に
2 期 岸本 展	非線形分散型偏微分方程式の初期値問題の適切性と解の挙動	4 期 花田 政範	素粒子物理学の未解決問題に対する計算物理学的アプローチ
2 期 熊谷 誠慈	インド・中国・チベットに展開した中観派思想の比較研究	4 期 原村 隆司	進化生態学的手法を用いた、外来生物の新たな駆除方法の開発
2 期 小林 努	拡張重力理論による加速膨張宇宙の研究	4 期 藤井 啓祐	スケラブル量子情報処理のための量子フォールトトレランス理論
2 期 Simon R. Creak	Sport, Culture and Regional Community in Southeast Asia: An Alternative Vision of Region-Making	4 期 藤井 崇	死を刻む: キリシア語銘文からみた古代地中海世界の死生学
2 期 沙川 貴大	ゆらぎの大きな情報処理システムにおける非平衡統計力学の構築	4 期 細 将貴	左右非対称性の進化生物学
2 期 佐藤 拓哉	生態系間相互作用と生態系機能: 寄生者の生態的役割の解明	5 期 Sarah Kashani	Zainichi Korean Entrepreneurs and Ethnic Economies in Japan
2 期 長尾 透	巨大ブラックホールの形成と進化の観測的研究	5 期 Stefan Gruber	Cultural diversity, heritage protection, and sustainable development in Asia
2 期 西出 俊	ロボットの経験に基づく発達的な感覚運動統合モデルの構築	5 期 Jennifer Coates	Re-writing History: Women and War Memory in Japanese Film 1945-1970
2 期 西村 周浩	文脈の中の言語: 古代イタリア諸言語が映し出す宗教的精神活動	5 期 起川 滋行	多細胞生物の模様形成機構を構成的に理解する
2 期 信川 正順	特性X線・硬X線・ガンマ線の統合による銀河中心活動性の解明	5 期 鈴木 咲衣	絡み目と三次元多様体の量子不変量の研究
2 期 村田 陽平	人間の感情と社会空間をめぐる「感情の地理学」の基盤的研究	5 期 鈴木 多聞	第二次世界大戦の終結と戦後体制の形成
2 期 森 靖夫	戦間期(1919〜37年)における日中関係史の実証的研究	5 期 武内 康則	契丹学の構築: 契丹の言語・歴史・文化の新しい研究パラダイム
2 期 山崎 正幸	タンパク質凝集性疾患におけるポリマーの動的形成と毒性の制御	5 期 Menaka De Zoysa	電子・光子の状態制御に基づく高効率熱輻射光源を用いた熱光発電
2 期 江間 有沙	情報セキュリティとプライバシーの「曖昧性の効用」の実証的研究	5 期 時長 宏樹	地球温暖化と自然変動の相乗効果による急激な気候変化の解明
3 期 大河内 豊	超対称性をもつ場の理論に関する研究	5 期 中嶋 浩平	Physical Reservoir Computing: Pursuing the Nature of Information Processing
3 期 北村 燕子	新奇集光特性を有するビームを用いた次世代光デバイスの創生	5 期 樋口 敏広	「地球環境問題」の誕生: 放射性降下物問題とリスクをめぐる国際政治
3 期 小石 かつら	近代的演奏会の成立と変遷の総合的実証研究	5 期 Niels van Steenpaal	近世・近代日本の伝記叢書にみる「人間」の創造
3 期 小松 光	森林整備によってダムへの洪水緩和の機能は代替できるのか?	5 期 Hemant Poudyal	Sodium/glucose co-transporter-1 (SGLT1) and glucagon like peptide-1 (GLP-1) mediated nutrient sensing in metabolic disorders.
3 期 後藤 励	医療技術評価に関わる個人・社会の嗜好や知識	5 期 前野 浩太郎	アフリカにおけるサバクトビバッタの相変異の解明と防除技術の開発
3 期 坂本 龍太	ブータン王国における地域在住高齢者ヘルスケア・システムの創出	5 期 Bill M. Mak	Transmission of Indian astral science in East Asia and Southeast Asia
3 期 Silvia Croydon	Closing the Regional Human Rights Gap: The Future of the Asia Pacific Forum in East Asia	5 期 村上 慧	硫黄元素の特性を生かした新規有機分子構築法の創生とその展開
3 期 Jesper Jansson	Algorithmic Graph Theory with Applications to Bioinformatics	5 期 和田 郁子	近世インド海峽都市の発展に伴う広域社会の変容に関する史的・研究
3 期 Jeremy Rappleye	Development Aid and Education at the End of an Era: Japan, the West, and the Potential for Paradigm Shift	5 期 山道 真人	生態と進化のフィードバック: 理論と実証によるアプローチ

03. 人数

■ 人数の推移（各年度4月1日時点の在籍者数）



■ 採用者数の国籍内訳



04. 学位取得大学一覧

■ 修士取得大学

京都大学、東京大学、オックスフォード大学、北海道大学、ネシャテル大学、東北大学、関西学院大学、大阪大学、三重大学、香港大学、ボルドー大学、パリ第4大学、ハーバード大学、東京工業大学、筑波大学、総合研究大学院、シドニー大学、神戸大学、ゲーテ大学、京都市立芸術大学、カルガリー大学、茨城大学、青森大学、ロンドン大学、リーズ大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン、レンヌ大学、クイーンズランド大学、ニューヨーク州立大学、メルボルン大学、 Lund 大学（順序不同）

■ 博士取得大学

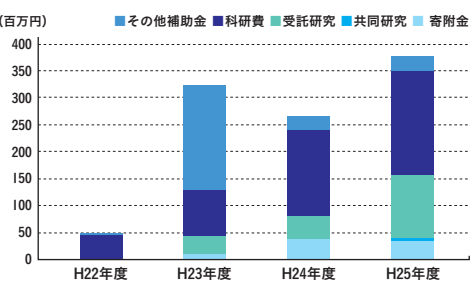
京都大学、東京大学、オックスフォード大学、東北大学、神戸大学、東京工業大学、大阪大学、北海道大学、オーストラリア国立大学、欧州大学院、高麗大学、Lund 大学、クイーンズランド大学、カリフォルニア大学、カルガリー大学、関西学院大学、九州大学、京都工芸繊維大学、ソルボンヌ大学、シドニー大学、ジョージタウン大学、ネシャテル大学、ハイデルベルグ大学、北京大学、ボルドー第3大学、三重大学（順序不同）

05. 採用前の所属先

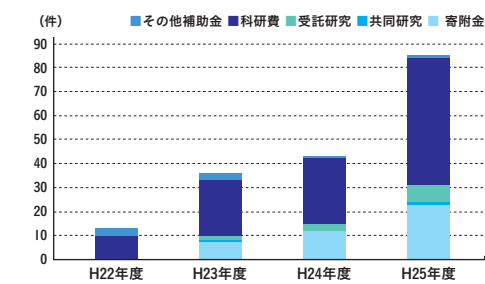
京都大学、物質・材料研究機構、大阪大学、武漢大学、シドニー大学、日本IBM、特定産業研究推進機構、ケンブリッジ大学、総合地球環境学研究所、九州大学、早稲田大学、神戸大学、理化学研究所、国立国際医療センター、国際農林水産研究センター、甲南大学、南九州大学、KEK 理論センター、CREST、ハワード・ヒューズ医学研究所、モリタニア国立サバクトビバッタ研究所、愛媛大学、カリフォルニア工科大学、秀明大学、東京大学ビッグバン宇宙国際研究センター、カーネギーメロン大学、東京大学、お茶の水女子大学、欧州大学院大学、海外研究開発機構、ハワイ大学、マックスプランク研究所、フロリダ大学、ハーバード大学、ネシャテル大学、チューリッヒ大学、スタンフォード大学、ウィスコンシン州立大学マディソン校、スイス科学財団、アムステルダム大学、名古屋大学、南クイーンズランド大学、スクリプス研究所、藤田保健衛生大学、ロンドン大学、JST、オーストラリア国立大学（順序不同）

06. 外部資金獲得実績

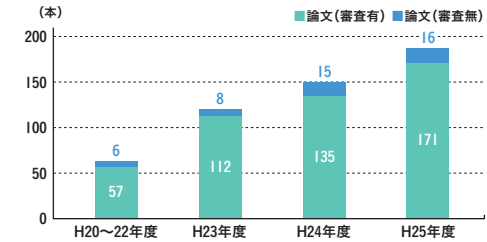
■ 年度別受入金額



■ 年度別受入件数



07. 学術論文数



08. 特許数

年 度	特 許 数
H22年度	3
H23年度	0
H24年度	2
H25年度	3
合 計	8

09. 学会発表数

年 度	学会・シンポジウムでの口頭発表（招待含む）
H22年度	64
H23年度	164
H24年度	229
H25年度	287
合 計	744

■ おもな科研費・その他補助金の内訳（平成25年度）

資 金 名	件 数	直接経費※	間接経費※
科学研究費助成事業	53	148.2	44.5
最先端・次世代研究開発支援プログラム	1	21.6	6.5
戦略的創造研究推進事業個人型研究（さががけ）	3	46.2	13.9

※単位：百万円

備 考 左図で「その他補助金等」がH24年度に大幅に減少したのは、NEXTプログラム代表者2名が他機関に転出したため。

10. メディアでのおもな紹介・執筆記事

(平成25年度)

■ 紹介記事

白眉センター

「若手研究者を『白眉プロジェクト』で支援」、朝日新聞(平成25年5月29日)

Aaron L. Miller

Whiting Robert, “Corporal punishment has long history in Japanese sports,” The Japan Times(平成25年5月26日)
Patrick St. Michel, “When it comes to discipline, leave it to the locals,” The Japan Times(平成25年10月27日)
William Stewart, “Discipline: Soul searching as survey reveals Japan’s dark side,” Times Higher Education Supplement, UK(平成25年9月13日)
Melissa Suzuno, “Just a small-town Boy: Life in rural Japan as a JET teacher,” AfterCollege Blog(平成25年9月4日)

江波 進一

「京大、120年来的謎だった水の界面で起こる『フェントン反応』の機構を解明」、マイナビニュース(平成26年1月10日)

小林 圭

「京大、パナソニックと共同で抗体分子を可視化」、朝日新聞DIGITAL(平成26年1月20日)
「抗体Y字くっきり：特殊顕微鏡で画像化」、京都新聞(平成26年1月20日)
「抗体分子を可視化：パナソニックと共同で」、日刊工業新聞(平成26年1月20日)
「京大など、FM-AFMによるマウス由来『IgG抗体』の非破壊観察に成功」、マイナビニュース(平成26年1月23日)

米田 英嗣

「自閉症の人は……」、KBS京都(平成25年6月24日)
「自分と似た性格共感?：京大准教授ら物語活用で解明『当事者同士支援も』」、京都新聞(平成25年6月25日)
「対人関係苦手な発達障害者：似たタイプの人と共感しやすい?」、中日新聞(平成25年6月25日)

齊藤 博英

「細胞内タンパク質合成に制御スイッチ：京大、iPS応用に期待」、京都新聞(平成25年9月3日)
「京都大学iPS細胞研究所、iPS細胞の内部状態感知し外部遺伝子を制御」、日刊工業新聞(平成25年9月4日)
「遺伝子放出する分子、京大、がんの細胞死を誘導」、日経産業新聞(平成25年9月4日)
「京大、細胞内でスイッチの性能を調節・反転可能な『RNAインバータ』を開発」、マイナビニュース(平成25年9月6日)

坂本 龍太

「ブタンで高齢者の健康診断を進める京都大学特定助教」、読売新聞(平成25年12月3日)

塩尻 かおり

「植物の香り：昆虫動かす」、読売新聞(平成25年10月31日)

中西 竜也

「対話の歴史：中国ムスリム」、読売新聞(平成25年7月2日)
「サントリー学芸賞に8氏」、日本経済新聞(平成25年11月11日)
「中国のイスラム教徒研究でサントリー学芸賞を受賞」、中日新聞(平成25年11月27日)
「この人」、東京新聞(平成25年12月1日)
「中国ムスリム、命がけの『共生』」、朝日新聞(東京版、平成26年1月21日)
「中国ムスリム、命がけの『共生』」、朝日新聞DIGITAL(平成26年1月22日)
「中国ムスリム：和して同ぜず」、朝日新聞(平成26年2月3日)
「存在感増す中国ムスリム」、読売新聞(平成26年3月24日)

Pierre-Yves Donzé

インタビュー, “L’industrie horlogère dans un monde globalisé,” Minovarc, La Chaux-de-Fonds, Switzerland (平成25年5月25日)*
※収録動画: Dailymotion(http://www.dailymotion.com/video/x12fq85_l-industrie-horlogere-dans-un-monde-globalise-enjeux-et-consequences_tech)

細 貴将

「生物の右・左に着目」、読売新聞(平成25年6月13日)
「神々しい、感染がユニーク…『珍菌賞』若手研究者ら創設」(写真提供)、朝日新聞DIGITAL(平成25年6月13日)
「右利き・左利きの謎：生物の進化・生存競争にも影響」、朝日新聞(平成25年10月28日)
「右?左?の謎：“きき手”研究最前線」(TV番組『ガリレオX』)、BSフジ(本放送、平成26年1月26日)

■ 執筆記事

Aaron L. Miller

「日本の体罰に関する著作『体罰の言説』で、私は、何を、なぜ、どのように書いたのか」*、星野恭子 訳、NO BORDER(平成25年9月16日) ※記事全文: NO BORDER(<http://no-border.co.jp/archives/14676/>)

Jeremy Rappleye

“Higher-education stimulus would be sure bet for Japan,” The Japan Times(平成25年12月13日)

Pierre-Yves Donzé

“Les origines historiques d’un monopole,” Le Temps, Switzerland(平成25年7月7日)

小石 かつら

「鍵握るのは『時間』と『場』：演奏会をめぐる環境」、神戸新聞(平成25年5月31日)
「蜜行に抗う死者の対話：大阪フィル『戦争レクイエム』」、神戸新聞(平成25年11月30日)

後藤 励

連載記事「正しい活用法」(リレー連載「やさしい統計学」、日本経済新聞(平成25年8月20～23日、26～28日)
1) データを基に意思決定、2) 標本の特徴考え一般化、3) 目的・費用で標本決まる、4) 確率計算使い仮説検定、5) 追跡して因果関係調査、6) くじで条件決め比較、7) 状況に応じ研究選択、8) 効果見極め行動、9) 主観必要な部分を区別

11. 転出先

年 度	転出先および職名	専 門 分 野
H22年度	京都大学大学院農学研究科助教	有機化学
	関西学院大学文学部准教授	認知科学
	同志社大学法学部助教	日本政治外交史
H23年度	京都大学大学院医学研究科教授	腎臓病学
	北海道大学大学院理学研究院特任助教	理論化学
	京都大学大学院人間環境学研究科助教	生態学
	京都大学大学院農学研究科助教	園芸学
	立教大学理学部准教授	宇宙論
	京都女子大学発達教育学部講師 →京都大学こころの未来研究センター准教授	仏教学
H24年度	近畿大学文芸学部講師	人文地理学
	東京大学大学院総合文化研究所准教授	物理学
	ニューヨーク大学アブタビ校准教授	構造化学
H25年度	京都大学数理解析研究所講師	数学
	神戸大学大学院理学研究科准教授	生態学
	九州大学基幹教育院准教授	素粒子論
	京都大学情報学研究科准教授	プログラム言語理論
	愛媛大学宇宙進化研究センター教授	天文学
	東京大学大学院数理科学研究科准教授	数論幾何学
	広島大学大学院総合科学研究科准教授	前近代の日本宗教史
	名古屋大学物質科学国際研究センター助教	有機化学

12. 白眉センターの組織としての刊行物の種類と号数

年 度	刊 行 物
H22年度	平成22年度 次世代研究者育成センター要覧(The Hakubi Project at a Glance 2010)
H23年度	次世代研究者育成センターだより 第1号
	平成23年度 次世代研究者育成センター要覧(The Hakubi Project at a Glance 2011)
H24年度	次世代研究者育成センターだより 第3号
	平成24年度 次世代研究者育成センター要覧(The Hakubi Project at a Glance 2012)
	白眉センターだより (旧次世代研究者育成センターだより) 第4号
	白眉センターだより (旧次世代研究者育成センターだより) 第5号
H25年度	白眉センターだより (旧次世代研究者育成センターだより) 第6号
	平成25年度 次世代研究者育成センター要覧 (The Hakubi Project at a Glance 2013)
	京都大学白眉センター 活動評価報告書

発 行 京都大学 白眉センター
TEL 075-753-5315
E-mail hakubi@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
<http://www.hakubi.kyoto-u.ac.jp/index.html>
発 行 日 平成26年8月21日
企画・編集 京都大学 白眉センター、学術研究支援室
制作・印刷 株式会社WAVE



京都大学 白眉センター

The Hakubi Center for Advanced Research,
Kyoto University